

著者序文

「人間は肉体だけの存在なのか」、「靈魂や魂はあるのか、あるとすれば、どのようなものか」、これは誰でも一度は考える問題ではないでしょうか。この問いは子どもでも考える非常に根源的なものにも関わらず、家庭でも学校でも一般に教えられることはありません。子ども時代に、周りから見聞きした話や体験から、自分なりに考えを作り、そのまま大きくなっていつているという場合が多いように思います。

私の場合は、子どもの頃に靈魂というものはあるだろうな、と思っていました。それは、盆正月に東北の両親の実家を訪ねた際に、仏壇に手を合わせるのを当然の習慣としていたこと、寝ている間に靈が自分の部屋に訪ねてくるといった体験をもったこと、小学生のとき塾の先生から人は死ぬと魂はトンネルを抜けて明るいとこへ出るといった話を聞いたことなどから、自然とそうなっていたのです。

そして、大人になってからスピリチュアリズムと出会いました。スピリチュアリズムは、十九世紀西洋の靈魂の科学的研究から生まれた、人は死後も生き続ける、靈魂は存在するという原理に基づく生き方です。私が出会ったスピリチュアリズムは、西洋生まれのスピリチュアリズムが日本に入ってきて発展した結果成立したネオ・スピリチュアリズムでした。このネオ・スピリチュアリズムによる靈魂の話は、これまでの宗教や習俗による話と違っていました。ネオ・スピリチュアリズムでは、靈魂を、宗教

のようにドグマ（教条）として、そして死後の問題として説くのではなく、学問のように理性的かつ原理的に、そして死後だけでなく、この世での人間の生き方、幸不幸、健康や病気に根源的に関わるものとして説いていました。

それだけでなく、「人間は肉体だけの存在なのか」、「靈魂や魂はあるのか」という冒頭の問いが、個人にとって極めて重要なだけでなく、人類全体の生存や地球の存続にも関わる問題だということを知りました。なぜなら、「人間は肉体だけ」とする考えからは、どうしても、人は利己的、利己的生き方になってしまいます。肉体の生存のためなら何をしてもいい、後はどうなっても構わない、人生死んだらそれまで、となるからです。「人間は肉体だけ」とするのは、今の科学が暗黙の前提としていることでもあります。ところが、魂があつて、死後の生命があり、因果の法が存在して自己の行為には自分で責任をとらなければならないとなると、生き方を変えざるを得なくなつてきます。「人には魂がある」という考えが広まれば、他者や地球を大切にする人が増え、地球は美しく生まれ変わっていくでしょう。「人間は肉体だけの存在なのか」という問いは、これほどの重要な問題だったので。

そこで、「人には魂がある」ことを世の人々に広く知って欲しいと思いました。ただし、私はこれを、宗教によらず、スピリチュアリズムによらず、可能な限り科学的に行いたいと思えました。科学が現在、世の中で最も信頼されているものだからです。科学は五官に触れるものを対象とします。ところが、魂とは目に見えず、手で触れられません。そこで、魂それ自体ではなく、魂を考える代替療法を対象とし

たのです。療法自体は、この世に現実にあるものですから……。

現代西洋医学もやはり科学の産物であり、「人は肉体だけ」という身体観をもっています。ところが、東洋医学などの伝統的療法やシュタイナー医学などは、気という見えない非物質的エネルギーがある、あるいは、人には「見えない体」があるとすると、スピリチュアルな身体観をもっています。多くの代替療法がもつ、このようなスピリチュアルな身体観という理論が誤っているのであれば、実際に効果も出ず、その療法を施す人も受ける人も現れず、その療法は存続してこなかったはずです。療法の実践は、科学で言えば仮説の有効性を検証する実験にあたるものと考えました。本書では、東西古今の複数の療法で、「見えない体」の存在を前提として療法が実践されていることを示しています。

本書の元となったのは、二〇〇七年度の放送大学大学院文化科学研究科の修士論文として提出した「健康づくりとスピリチュアリティ―健康づくりにおけるスピリチュアルな身体観の重要性―」と題する論文です。そのため、本書は論文調の文体と形式になっています。出版にあたり字句を修正したほか、第五章の「スピリチュアルな身体観が拓く未来医学への道」を執筆、追加しました。医学は、「見えない体」を考えることで大きくその姿を変えるものと思われまます。そして、新しい医学、未来医学は、個人だけでなく人類全体の真の健康と平和を目指す医学となるでしょう。この思いから、本書の題名を『未来医学への布石 人間には「見えない体」がある』としました。「見えない体」を考える未来の医学が、地球に実際に誕生し、人類全体の健康と幸福、そして地球の平和が実現することを願ってやみません。

本書を、人々の健康について考えておられる、医学、代替療法、ホリスティック医学、心理療法、ターミナルケアなど様々な医療や療法の施療家、看護師、研究者、患者、その家族の方々などに読んで頂き、参考として頂ける場所があることを願っております。けれども、元々は、幅広く様々な方に読んで頂きたいと思つて執筆しました。「見えない体」をどう考えるかは、現代における非常に大きな課題となつていてと考えるからです。昨今はスピリチュアルといった言葉もよく見聞きするようになり、靈性（スピリチュアリティ）は大きな学問的なテーマとなつてきています。「人は肉体だけの存在なのか」、「靈魂や魂とはあるのか、あるとすれば、どのようなものか」、この問いへの答えをスピリチュアルな療法から探つたのが本書です。なお、本書で取り上げた療法については文献的調査が主となつており、行き届かない部分も多くあると思われまふ。ご専門の諸賢先生や皆様方からご指摘ご叱正賜れば幸いです。本書の元となつた論文作成にあつては、東洋大学経営学部の石井薫教授に懇切丁寧なご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。また、拙論の出版を熱心に勧めて下さつたリラ研究グループ自然音楽研究所の山波言太郎先生には、心より感謝申し上げます。さらに、本書の出版を快くご了解下さつたどのぼう出版の熊谷えり子氏にお礼申し上げます。

はじめに

健康は万人の願うところだ。それでは、健康とは何か。肉体に故障や病気がないことが健康とされることも多い。世界保健機構 (World Health Organization、以下WHO) では健康は肉体だけの問題ではないとして、次のように定義してきた。「健康とは、肉体的 (physical)、精神的 (mental)、社会的 (social) に良好な状態 (well-being) をいう」。人間は、肉体をもつ物理的存在だけでなく、精神活動や社会的活動も行う存在であるから、人間の肉体以外の側面に着目したWHOの健康の定義は十分理解できる。さらに、このWHOの健康の定義を改定しようとする動きがある。「スピリチュアルに良好な状態 (spiritual well-being)」をも健康の定義に含めようとするものである。

この健康の定義改定案は、WHOの総会での本格的議論に至らず、現在保留とされた状態であるが、大きな論点を含んでいる。スピリチュアルに良好な状態と何か。それは、精神的に良好な状態 (mental well-being) とどう違うのか。また、スピリチュアルに良好な状態の内容として、世界の各国政府や医療関係者が合意できるようなものがあるか。さらに、実践面について、スピリチュアルに良好な状態の診断や治療は可能か、可能だとするとどのようなものがあるか、などである。

他方で、日本国内においても、スピリチュアルな世界観をもつ代替療法に対して社会的な関心が高まっている。心身の不調や病気の際に、西洋医学による療法以外に、鍼灸や気功、瞑想やヨーガなどの療

法が選択されることも増えてきている。また、ホスピスなどの末期医療では、死を待つほかない患者に対して「スピリチュアル・ケア」と呼ばれるケアがなされるようになってきている。

これらの諸例から見られるように、人々の健康を目指す医療にとってスピリチュアルなもの、スピリチュアリティは、重要な実践そして研究の課題となってきた。 「スピリチュアリティ」とは、「精神性」とも「霊性」とも訳されることがあるが、その意味内容は論者によって様々で、非常に多義的な使われ方をしている。本書は、この新しく、また幅の広いスピリチュアリティの問題の中から、「スピリチュアルな身体観」をテーマとして扱う。なぜなら、健康を実現しようとする活動において、どのようなことが行われるにせよ、人間観・身体観が重要な背景となるからである。人間観・身体観が異なると、採用される手法（治療法、日常生活の過ごし方）も異なってくる。人間観となると非常に幅広く奥深い問題であり、また抽象的になりがちでもある。本書においては、この問題を、身体をどう考えるか、身体観の観点から可能な限り具体的に論じたい。

人間が肉体だけではないとすると、それでは何があるのか、という問題が生じる。日本を含む世界の多くの地域で古来から伝わっている身体観によると、それは靈魂、魂（たましい）ということになる。これは従来は宗教が語ってきたところで、科学が扱える問題ではない、あるいは扱うべきではないとされてきた。

しかし、本書ではこの問題を人文学の一分野である宗教学の課題ではなく、可能な限り健康に関する